

# 播磨風土記を掘る

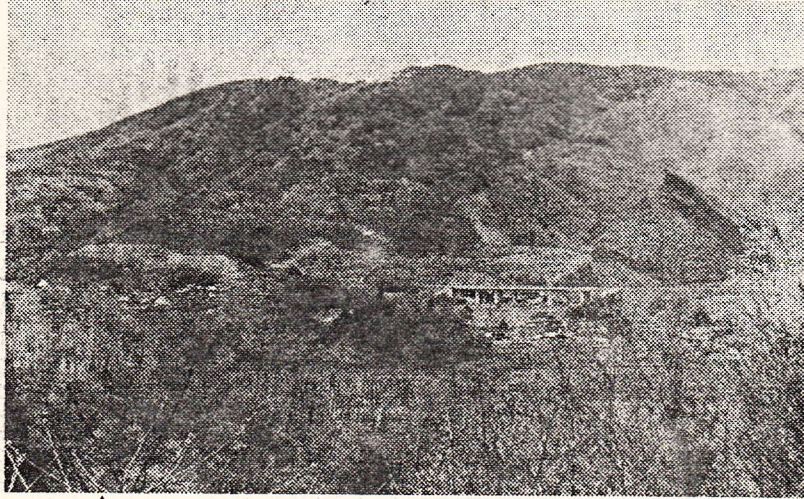
★ 4 ★

「鹿庭山。この山の四面に十二の谷があり、皆、鉄を生ずる。難波の豊前（とよさき）の朝廷（みかど）に、始めて進（たてまつ）りき」。讚容（佐用）郡の冒頭に出てくる有名な記述だ。鹿庭山というのは、鹿をたくさん放ったため、こつこつ名付

けられたとされるが、同郡佐用町の大撫山（標高四百三十メートル）のこと。古歌に「佐用の朝霧」としばしば歌われているように、一帯は霧の名所で、夏の終わりのころ、谷々から霧が湧（わ）き上がり、一面霧の海になるという。風土記の注釈書では一般に

## 千種川筋「たたら場」点々

(58.5.7 神戸)



「かにわやま」と読ませているが、地元の人々の呼び名は古くから「かんばやま」。水を充てると、金場山だ。「皆、鉄を生ずる」という風土記の記述には「かんばやま」の方が似つかわしい。

現在でも、大雨が降ったあとなど、大撫山から流れ落ちる水は、どことなく黒っぽい色草という。（中略）檜（ひのき）杉生い、鉄を生（い）だす」。敷草村とは、現在の千種町のこと。千種川流域では古代から早々と製鉄が行われていたらしい。

佐用郡 佐用町 佐用郡 佐用町

### 鹿庭山

かに、兵庫にも製鉄の記事が見られる。「敷草村、草を敷いて神の座とした。故に敷草」といふ。（中略）檜（ひのき）杉生い、鉄を生（い）だす」。敷草村とは、現在の千種町のこと。千種川流域では古代から早々と製鉄が行われていたらしい。

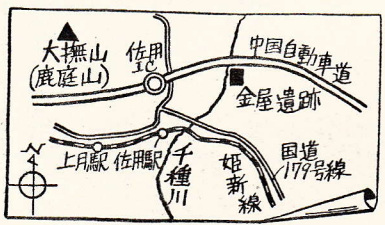
佐用郡南光町西下野の金屋遺跡。中国自動車道の西下野トンネルを西に抜けた通称・金屋山で発掘された「たたら場」だ。「たたら」というのは「たたら吹き」の略で、平たい炉に砂鉄と木炭を入れ、ふいごで風を送る製鉄法。炉の構造その他が多少進歩した程度で、明治の初め、英米から高炉方式の洋鉄生産が始まるまで、中国山地で広く行われていたやり方だ。

金屋山からは計五基のたたらが見つかっているが、時代は炉の周辺から大量に出土した土器から判断して八世紀の初頭。「播磨風土記」が編まれた時には、すでに稼働して

風土記が「四面十二の谷があり、皆、鉄を生ずる」と伝えている鹿庭（大撫山）

## 8世紀初頭から操業か 用脚として鍛冶鋼

いたことになる。山の斜面をL字型にカットして炉にした原始的な構造で、炉の規模は横六・五び、奥行き四・三び。炉の両端に掘って立て柱を建てたと推定される柱穴が確認されており、屋根を持った「たたら場」だったらしい。ふいごらしきものは発見されておらず、谷から吹き上げて



く自然の風をそのまま利用、火力を高めたようだ。鹿庭山からはまだ「たたら場」が発掘されていないが、山のあちこちで「かなくそ」（鉄の火）は完全に消え、播磨奥地の鉄山者は比較的遅くまで操業を続けた岡山、鳥取県などの中国山地に移住している。

江戸時代に入ると、鉄山労働者は数十人でグループを作り、千種川筋から引原川流域（兵庫郡波賀町）を転々と移動、生産された玉鋼は大坂などの市場に広く送り出された。山々を渡り歩く彼らは鉄山者と呼ばれ、金山所帯」と俗称される独自の社会を作り上げた。一般の農民とはほとんど交渉がなく、完全に閉ざされた世界。年に一、二度の祭りの時などには大挙して山を降り、手ひとつ金をはらい、日ごろのうっぷんを晴らしたという。

洋式高炉の導入とともに、風土記の記述以来、千余年の歴史を誇った「たたら」の火は完全に消え、播磨奥地の鉄山者は比較的遅くまで操業を続けた岡山、鳥取県などの中国山地に移住している。